

CLASSIC VICUS

2016 No.11

Vicus= ラテン語で地域、境界の意

独占崩れた JASRAC 著作権使用料はファンに安く作曲家に高く

ジャーナリスト/元朝日新聞記者・元浜離宮朝日ホール支配人 志村嘉一郎

「みなさんは、そんなに払っているの。私たちはその10分の1もいただけてない」。作曲家の黛敏郎氏がこう語った。

日本音楽マネージャー協会（現；一般社団法人日本クラシック音楽事業協会）の理事会では、日本音楽著作権協会（JASRAC）の運営に疑問をもつ声がいつも出ていた。黛氏が会長に就任したのを機会に、会って意見を交換することになった。それまで JASRAC の会長はクラシック以外の音楽界から選ばれ、理事長や専務理事は文部省からの天下りで、クラシック音楽界からはとりつく島もなかった。マネ協の神原芳郎会長の発案で、黛会長に会見を申し込み、渋谷公会堂で『題名のない音楽会』収録中の黛会長に、神原会長と家永勝専務理事、小生が面会したのである。

伏魔殿的経営に疑問

私たちが黛会長に訴えたかったのは「JASRAC の伏魔殿的運営を正す」ことだった。三人が黛会長に申し上げたのは①著作権の使用料を独占的に徴収している JASRAC の決算や組織、陣容が公開されていない。②われわれが支払った使用料の何パーセントくらいが作者に渡っているのか。作者が外国人の場合、どのように送金しているのか。③浜離宮朝日ホールの場合、入場料 3000 円の室内楽公演で一席あたり約 400 円も使用料をとられている。実に売り上げの約 13%もが使用料で、レコード会社の 6%、テレビ局の 1.5% に比べ、クラシック業界からは取り過ぎではないか。④盛り場の有線放送などでは、使用料を取っていないものが多いと聞く。真面目な正直者からはどんどんふんだくり、体力の強いならず者は見逃して使用料をおまけしているのか。⑤九州地区の

JASRAC の事務所は熊本にあるが、事務所の職員は 5~60 人もいるそうだが。使用料の徴収にそれほど多くの人が必要だとは思えず、赤字倒れなのではないか、など具体的な話を申し上げた。「わたしも会長になったばかりなのでよくわからない。事務局によくきいて回答します」が、黛会長の答えだった。1、2年後、黛会長は退任し、クラシック以外の音楽界の人が会長になった。

決算・運営を外部に不公表

JASRAC 事務局からわれわれに伝わってきたのは「JASRAC は文部省にのみ決算や運営の報告義務があり、外部に公表する必要はない」という官僚答弁だった。そこで「JASRAC を目覚めさせるのには、国会で質問してもらおうのが手っ取り早い」と議員会館を訪れ数人の議員に陳情したが、国会閉会中で質問は日の目を見なかった。

20 年ほど前の話だが、JASRAC の運営は今も変わっていない。日本音楽プロデューサー協会の会員も、JASRAC にはいじめられればなした。

独占禁止法違反の疑い

JASRAC が発足したのが 1939 年、以来 75 年間も JASRAC は音楽著作権の管理を独占し、年間数千万円も取る天下り高級官僚によって支配されてきた。それが昨年、最高裁によって風穴を開けられた。最高裁は 2014 年 4 月、JASRAC は「他業者の参入を妨げており、独占禁止法違反の疑いがある」との判断を示した。すでに 2001 年 10 月施行の著作権等管理事業法により、JASRAC の独占に終止符が法律的には打たれたが、新規参入業者が出て、JASRAC が既得権益を握っており、参入は事実上難しかった。

新規参入で管理料値下げ

最高裁の判断をうけエイベックス・グループ・ホールディングスが昨年、JASRAC からの離脱を決めた。JASRAC に管理を任せていた約 10 万曲を引き上げ、系列のイーライセンスに委託する、という。これにより JASRAC が、売り上げの 6% 取っていた CD の著作権管理料が 5% に下がる。自由化と民営化の効果が早くも出てきて、75 年もつづいた JASRAC の独占体制の一角が崩れたのである。

膨大な人件費はどこに

JASRAC は最近、やっとホームページで情報を公開するようになった。しかし、著作権管理料を支払う消費者が本当に知りたい情報は公開されていない。JASRAC の 2014 年度の徴収額は 1124 億円、分配額 1114 億円。差し

引き 10 億円が事務局の経費ということになる。だが、事務局員の年収は 30 代初めで 780 万円（月給 30 万円、手当で月 15 万円、ボーナス年 2 回 240 万円）。正職員は 480 人。社会保険料や退職金積み立てをいれれば、これだけで人件費が 40 億円以上にもなる計算だ。文科省からの天下りは他の官庁なみに年間約 3000 万円も取っているという話も伝っており、総人件費はさらに膨らむ。結局は、分配を多く見せるために、分配経費に正職員や派遣、アルバイト職員などの人件費や事務局経費をぶち込んでいるものとみられる。

消費者にとって著作権使用料は安ければ安いほうがいい。作曲家にとっては高ければ高いほうがいい。両者をつなぐ管理事業者は、独占でなく自由化し民営化すれば、競争によって中間経費が少なくなり消費者・作曲家双方にメリットが出てくるのはまちがいない。

会員から JASRAC への疑問や不満

■ JASRAC への申請は基本、主催者が行う。これがまた、結構な手間だ。作曲者だけでなく、編曲者の記入は仕方がないが、曲ごとの時間を正確に記入しなければならないし、器楽曲ならまだしも、歌詞がつく場合は作詞家も必要だし、翻訳ならさらに手間がかかる。出演者も翻訳者を知らない場合があれば、楽譜の出版社に問い合わせなければならない。それが、10 曲～ 20 曲もあれば、調べるだけで一日仕事である。そんな手間をかけて申請しても、実際にその作家たちに還元されているのなら意味のあることかもしれないが、問題は、ほんとうに作者に適正な金額が支払われているのか、という点にある。

また、TPP 交渉が成立すれば著作権が現行の死後 50 年から 70 年に引きのばされるらしいが、そもそも作者亡きあとの著作権とはいったいなんなのか？ という疑問もある。

■ いつの間にか、何の根拠もなく金額が上がっていく。それに対する理由や説明等はまったくない。上がりますよというお知らせのみ。その分作曲者への支払額が上がった、という話も聞いたことが無い。→ 実際に作曲者へどのくらい払われているのかもわからない。

■ 演奏者が地方公演のツアーで自分の曲を演奏したのに、その分のお金が微々たるものしか入らなかったの、翌

年のツアーでは、各主催者に JASRAC にいくら払ったのかを全て聞いて、その金額を JASRAC に言ったら前回の何十倍ものお金が振り込まれた。

■ 2 階席のあるホールで 2 階席に人を入れていないのに、全席数で請求された。1 階席しか使用していないので、1 階席の座席数で計算しろ、と言ってもまったく無視した請求書がきた。

■ 元々客席数で支払金額が違う事自体がおかしい。客席数が違うからといってこちらが出演者に払う出演料が変わることなどあり得ない。チケット代は経費全体をみて決めるのであって、客席数でチケット代金が変わる事もない。

■ 「包括契約」というのをできる団体とできない団体があり、同じ曲を同じホールで同じチケット代で演奏しても、主催者によって支払う金額が違う。要するにほかより高く請求されているのです。これはまったくの不公平。演奏することは同じなのだから全て同じ金額のはず。

(2015 年 11 月 25 日の例会にて 於：東京文化会館会議室)

会員が発題する勉強会

右肩上がりのインターネットを利用する広報

オフィス アルシュ 代表 兼岩好江

外部講師を招いて公開で行う勉強会とは別に、会員による（発題する）内向けの会として発表の機会をいただきました。これまでも本協会ではツイッターやフェイスブック（FB）について専門家を招いて学ぶ勉強会（公開）が幾度か設けられて来ましたが、それによって消極的だった私も今ではHP、ブログ、ツイッター、FB等、インターネット利用なくしては夜も日も明けられないほどですが、私自身は特にパソコンやインターネットに詳しい訳ではなく、初心者が必要に迫られて取り組んでいる程度。そういう立場からの発表であることを初めにお断りした上で一時間ほどお話をさせていただきました。

1. 音楽プロデューサー協会のFBページ

協会HPが切望された際、費用をかけずにほぼ同じ役割を果たす、あるいはそれ以上の効果を得ることができるとしてフェイスブックページが作成されました。複数の人で運営されており私もその一人ですが、本協会の存在と活動をより広く発信するには、まず会員の方々が積極的に（いいねを押す、コメントを書くなど）関わってほしいと考えています。会員以外の方、FBをされない方にもご覧いただけますので是非お立ち寄り下さい。

<https://www.facebook.com/ProducerKyokai/>

2. インターネット広報ツールを利用して

演奏会告知のための広報媒体として、予算の関係もありできるだけ無料のインターネットツールを利用しています。ブログ、ツイッター、FB（個人）、FBページ（団体として、時にはコンサート別など）、メールマガジン、演奏会告知サイトへの登録等。インターネットの危険性は良く言われる通りなので、個人情報の取り扱いなど留意しつつ利用しています。利用する上で徐々に考えるようになったのは、単に発信するだけでなくコミュニティを作り出す能力が問われること。これからも試行錯誤しつつ取り組んでいきたい。

広報について考える時いつも思い起こすのは「広告学校」のことです。常に小さな予算で（時には予算ナシで）広報する立場なので非現実的ではあったのですが、雑誌

「広告批評」で情報を見つけて思い立ち2006年～2007年にかけてコラムニスト故・天野祐吉氏主宰の「広告学校」に第45期生として参加しました。天野氏をはじめ大手広告代理店やフリーで活躍するクリエイターたちの話を聴く機会は得難いものでした。

当時、広告媒体としてのランキングではもちろんテレビがトップに君臨していました。しかしクライアントのデータ（企業がどの媒体に予算を当てるか）を元に、まもなくインターネットが右肩上がりに追い抜くだろう、新聞や雑誌など紙媒体は完成度の高いごく一部を除いて衰退し、ラジオは低い位置で安定するという推移がされていきました。今、検証するに足りる年数が経過したかどうかわかりませんが、インターネットはテレビと肩を並べたようだが経済の影響でしょうか、そうやすやすと乗り越えては行けない現状があるように思われる。確かに紙媒体は衰退し、話は少しそれますが、そのこと自体が文化そのものの質に影響を与えたと感じるのは私だけでしょうか。テレビは変容しつつも依然として大きな影響力を保持し続けているように感じる。多様化、細分化の現実を前に、どのような方法でどのような広報を展開できるのかについては、常にアンテナを張り巡らし情報を得て考察し続ける以外はないでしょう。

3. 協会広報と勉強会の今後

専門的でない内容に対する否定的なご意見を頂戴するだろうと覚悟していましたが、全体としてはむしろわかりやすかったという反応もあり、親近感を覚えて頂けたようでした。協会の広報については会報を柱にFBも発展させたい。温故知新、今回の発表を機に過去の勉強会記録を会報から文字データに起こしてまとめましたので是非ご覧下さい。（FBページ・ノートに掲載中）これからも共に学び合う場として勉強会が更に活発に行われること願うものです。私の当面の課題はFBの技術向上、ご指導ご鞭撻のほどお願い致します。

（2015年3月16日の例会にて 於：文化会館小会議室）



私の仕事の経歴

Career of my work

オルガンのいたずらから新演奏家協会へ

新演奏家協会 代表取締役 広瀬光康

昭和 11 年の生まれで 79 歳。岐阜県揖斐郡坂内村、現在の岐阜県揖斐川町坂内広瀬という所の出身です。福井県と滋賀県と岐阜県のちょうど境の山奥です。

小学校三年生の時が終戦でした。当時は野球少年で、毎日ボールを追っかけ、バットを振って、というような生活でした。

叱られるはずがレッスンに

四年生の時です。生徒が触ってはいけない事になっていた音楽室のオルガンを、数名でいたずらしていたんです。そこへ、師範学校を出たばかりの新任、日下部一校先生が急に音楽室に入ってきました。仲間はあっという間に逃げたんですが、「待ちなさい！」と言われ、私だけ立ち止まって逃げ遅れてしまいました。怒られるかと思いましたが、「あなたオルガンが弾きたいの？」と言われ、仕方なく「はい」と言いましたら、「放課後、野球に行かないでここへ来なさい」と。てっきり罰を受けるものかと思ってしぶしぶ放課後音楽室に行くと、先生がバイエルの楽譜を出して「さあ、これを弾いてみましょう」と、レッスンが始まってしまったんです。二日目はバイエルの 2 番を弾かされて、それが弾けるようになると先に進んで、と、順番に毎日練習をさせられました。そのときは音楽にまったく興味は無く、野球がしくて仕方が無かったのですが、とにかく放課後その先生の所に行かなければという、義務のようなものもありました。しかし徐々に、禁断のオルガンを独占できるという事もあり、弾いていく内に興味もわいてきて、そのおかげで音楽がどんどん好きになっていきました。終戦直後、昭和 21 年の事です。

その日下部先生が「学校に合奏部を作りたい」と言い出したのですが、当時学校にある楽器はシロフォン（下にパイプもついていない木琴ですね）、それにハーモニカ。あとはトライアングルとタンバリン。その 4 つの楽器しか無かったのです。縦笛もありません。それらの楽器を使うほかに、「何でも好きな楽器を親に買ってもらいなさい。」と言われました。終戦直後のそんなに裕福ではない村の人たちは、そんな楽器を買うお金なんてない、とちょっと揉めたのですが、校長先生が理解を示し「音楽の授業なら生徒の親にも理解してもらえるかも」ということで、授業で合奏を始めました。

村中大騒ぎ

そんな時、ちょうど音楽コンクールが始まりました。

合唱と合奏のコンクールです。そこで揖斐郡の一番北のはずれの坂内小学校が合奏でコンクールに参加したんです。当時揖斐郡で合奏なんてやっていたのは坂内小学校だけでしたから、いきなり県大会に出ることになってしまいました。それも木琴とハーモニカにトライアングルがぼこぼこちんちんいってるだけのような合奏団が出て行ったんです。当時岐阜県では多治見市に全国でも 1 位 2 位を争うような優秀な学校がありました。そんなところは雲泥の差です。ですがそんな山村の小学校が合奏をやっていて県大会に出場した、ということで話題になり、興味を持った NHK 名古屋放送局の学校放送に取り上げられて、放送されることになりました。

そんなことで村中大騒ぎになりまして、当時村にバスもなかったので学校から名古屋までみんなでトラックの荷台に乗って出かけていきました。放送局に着いても大騒ぎ。当時は収録なんてなく、すべて生放送でしたから放送局員たちが雑音をしないように木琴の下にフェルトをひいたりして、大変でした。学校では、残っている生徒は全員講堂に集まって、みんなでラジオを聞いていたそうです。

音楽をやらなければ

そんなことがあったので、「自分は音楽をやらなければ」と思うようになったのです。それは、指導していた日下部先生に音楽の道に導かれたという事です。その先生がいなかったら、私は音楽の仕事はしていません。それだけ影響力のある先生でしたが、それも音楽の持つ力の大きさというのが素晴らしいもの、魅力的だからこそ、なのでしょう。

その後中学を卒業時に、ちょうど岐阜県立加納高校に音楽科が設置されたので、そこに進学しました。当時の田舎では 1 割くらいしか高校へ行かなかったですし、まだ高校を出れば教員になれましたから、自分も卒業後は田舎に帰って音楽の先生になろうと思いました。ところが、入学して二年目に様子が変わり、大学に行かないと教師にはなれない事になりました。

結局、岐阜大学の教育学部と国立音楽大学を受験し、なんとか、国立音大の教育音楽科に入学。まだその時は「卒業したら田舎に帰って教師をやろう」と思っていた訳です。とはいえ、それがきっかけで大学生活を東京で送る事となりました。

入学して今度は、基礎ができておりませんから、「1 年を 2 曲で過ごすいい女（男）」と揶揄されるくらい、私は

4年間で前期・後期の試験曲をこなすだけでやっとでした。しかし、大学時代には貴重な体験がたくさんできました。「合唱行脚」と言われるくらい多くの小中学校へ訪問演奏に行きましたし、NHK交響楽団と「カルミナ・プラーナ」や「第九」で共演することもできました。

ラジオ東海に就職

卒業後は岐阜のラジオ局「ラジオ東海」へ就職しました。音楽のプロデューサーとして「音楽大学を出た」というだけで雇ってもらったんですが、そこでは、キー局で作られた録音テープを自分の局の放送に合うように編集するのが仕事でした。たとえばキー局で夜放送した「こんばんは裕次郎です」というテープがあったとします。それを岐阜の放送局では朝放送するんです。今は簡単にパソコンで編集ができますが、当時はテープを切って繋ぐ、という作業で、何の目安も無く切らなければならない。少し切り間違えば、「こんばんは」で切り取れず、おかしいことになってしまいます。そんな作業ばかりをしておりました。音楽の仕事、ではなくテープの技術者の仕事でしたので、まあそれは大変でした。一度すべてをコピーしてからテープを切らないとすぐに台無しになってしまう、なんてこともありました。

たった一週間の東日本交響楽団

その会社には5年間おりました後、再び東京へ出て行くこととなりました。

大学時代の同級生が当時、群馬交響楽団の副指揮をしておりました。当時の群馬は、特に学校公演がとても多くあったので、そのすべてに応える為、楽員を二つに分割して公演を行っておりました。ですから、全員での定期公演ができない、という不満が出て、定期公演を行うために「東日本交響楽団」というオーケストラが組織されました。その時の指揮者甲斐正雄さんが、東日本交響楽団を組織する時に阿佐ヶ谷にアパートを借り、楽員もそこに住ませました。練習場は赤坂公会堂。その時またまたそこで副指揮をしていた同級生に誘われまして、放送局にいてすでに結婚して子供もいたのですが、音楽の仕事にやはり興味があったので、思い切って一家揃って東京に引っ越してきました。見境もなくというかね、見事にダメになるんですけど。

オーケストラの事務局の仕事ということでしたが、放送局勤務時と同等の給料を保証し、一軒家を提供します、という条件でした。当時都内の家賃は私の給料と同じくらい高い金額でしたから、じゃあ倍の収入になるんだな、なんて喜びました。

その頃の自分は、オーケストラの仕事のなんたるか、とか、音楽事業をするのにどんなことをすればいいのか、なんてまったくわかりませんでした。「行って、言われたことをやればいいや」、くらいに思っていました。ところが、

が、暮れのボーナスが団員達に払われなくなり、その先の仕事も決まっていない、阿佐ヶ谷から赤坂の公会堂まで行って練習して帰ってくるだけ、となってきました。学校公演をしていたメンバー達は多少忙しくはしているのですが、どういう方針でオーケストラを運営していくのか、ということがありませんでした。このままオーケストラを運営するためには、どこかからお金をもらうか、演奏する仕事を探さなければならない。「それを獲得してくるのが事務局の仕事だ」、と言われ、「あ〜これは大変だな」となりました。とにかく組織を維持するためには、楽員たちに年越しのお金くらいは出さなければいけないだろうという事で、スポンサーである指揮者にお金を出すようお願いしました。しかし「年越しのお金を出す事がカンフル剤になりますか?」と聞かれたので、『カンフル剤』というのは一辺打てば元気が出てあとしばらくは続く、ということですから、続く見込みがないのですから、「それは一時しのぎで、カンフル剤では無いですね」ということから、「じゃあオーケストラをやめましょうか」という結論に。

阿佐ヶ谷の楽員達がいる所のポストに、「〇月×日、本日付けをもって、指揮者を辞任致します」という手紙を入れて、言い出しっぺの、指揮者、副指揮者ともう一人の三人が信州へ逃げちゃったんです。その後一週間、信州の宿から何の連絡も無く、どうしようもないので、楽員達はまた群馬に戻ったのです。

当時東京交響楽団の事務局長の橋本さんでしたかね、コンサートのスポンサーに降りられて、やりくりで苦しんで自殺をされてしまいました。それと同じ時期です。ですから、オーケストラの運営の厳しい時期、過渡期的な時期ではあったのかもしれない。

ビルの管理室の仕事から「第九」

そんなことがあって、たった一週間で東日本交響楽団の事務局は辞めまして、というよりオーケストラが無くなってしまったので、指揮者の紹介で京橋にあった貸しビルの管理室の仕事をする事になりました。当時の家賃が確か二万五千円だったかと思いますが、都内の家賃はとっても高かったんですね。ですからなんとか給料を稼がないといけませんので、職に就いたのですが、管理室の仕事の月給が二万円くらいでしたから、全く足りませんでした。

ところで、家内は高校の同級生で、「一緒に行こう」なんて思っていた岐阜大学の教育学部を卒業してピアノ教師をしていました。当時はちょうどヤマハがピアノを売ろうと一生懸命な時期で、ピアノを習い始める子供も多くなり始めた頃でした。音大を出ていない人にピアノを教わる人なんていないかも、とも思ったのですが、ピアノを教える先生はまだそんなにたくさんいなかったせい

か、生徒を募集してみたら、あっという間に集まったんですね。それで家内に助けてもらいながら、なんとか生活ができました。それが昭和39年です。

それから5年くらいビルの管理室に勤めました。すると、以前オーケストラに誘った男が、「第九をやりたい、もう日比谷公会堂を予約してあるから、手伝ってくれないか。」と持ちかけてきました。管理室の仕事は、月に一度の家賃の集金くらいで暇でしたから、彼を手伝うことにしました。当時「第九」をやると、合唱団員が一生懸命切符を売るので、ほとんど満席になりました。他のオーケストラでも「第九はボーナス」なんて言われてましたから、私が手伝った指揮者でさえも日比谷公会堂を満席にすることができました。そんなことがあって、やはり音楽の仕事をしたい、という思いが強くなりました。

広瀬音楽事務所を設立

そんな時、当時「麻布アーティスト」という、紺野さんという方が演奏家を2、3人抱えてマネジメントをしている音楽事務所があり、雇ってもらえることになりました。麻布アーティストはマネージャー協会（現クラシック音楽事業協会）の会員でしたので、そこで業界のいろんな方々と知り合うことができ、音楽の仕事を勉強させてもらいました。

1年くらいして、2、3人の演奏家だけでは稼ぐ事もできないし、どうしたもんか、という時に、紺野さんから「事務所を貸してあげるから独立しなさい」と言われ、広瀬音楽事務所を設立しました。当時マネージャー協会への入会は3年以上の実績が必要でしたが、神原音楽事務所、神原社長の「麻布アーティストで活動していたんだから良いじゃろ」の一言で入会する事ができました。

広瀬音楽事務所としてコンサートのマネジメントをコツコツとやり始めていた時、新演奏家協会の魚住源二さんが会社をたたむのではないかと、という噂があり、新演奏家協会所属の演奏家から「広瀬さん新演奏家協会に入ってくれたらいいのに！」と言われました。そこでいきなり新演奏家協会に行き「事務員のつもりで使ってもらえませんか？」と直談判したら、魚住さんから「もう（会社を）やめるつもりだったんだけど…。うーん…。じゃあ1月から来ていいよ。」なんてことになりました。ですが、広瀬音楽事務所もやっていましたし、両社の所属演奏家もいましたので、実際には会社を吸収合併して一緒にやるという形で、三か月後に始めたのです。しばらくは両方の会社の名前を使ってホール予約の抽選をしたりして（まあインチキですね）、1年くらいは両社の名前を使っていました。それが昭和48年。それから今までずっと新演奏家協会として活動してきました。

「電気が走る」感覚でのめりこむ

新演奏家協会となって、益々音楽の道にのめりこんでいったきっかけとなった演奏家に深沢亮子さんがいます。彼女の虎ノ門ホールでのリサイタルで、舞台袖で演奏を聴いていた訳ですが、頭のとっぺんから足の先まで、「電気が走る」というのでしょうか、「ゾクゾクッ」とするような感覚を覚えました。あの感覚は、今までいろんな方の演奏を聴いてきましたが、後にも先にもあれ一度だけです。それだけ素晴らしい演奏でした。「ああ、この仕事してきて良かったなあ！これからもこんな仕事をしていきたいなあ」とそこで強く認識しました。

新演奏家協会は、先代の魚住氏が昭和25年に創業以来、65年が経ちました。それまで事務所を支えてくれた代表的な演奏家が安川加壽子さんです。安川先生の事については、青柳いづみさんが著した「翼のはえた指 評伝安川加壽子（白水社刊）」という本が出版されています。詳しくは本をお読みになって頂ければと思いますが、最後のリサイタルでは右手の薬指、小指が上がらなくなってしまうのです。ところがそうになっているのがまったくわからない演奏で、後からそれを知って、私は本当に彼女の事を尊敬してしまいました。ただしあの時、演奏会を中止していれば、彼女のピアニストとしての寿命はもう少し延びたのではないかと、非常に残念に思っております。魚住さんがその決断をできなかったことが大変悔やまれます。

音楽のない生活は考えられない

そんな、いろいろな人達との関わりを多く持ったことが、音楽事務所を長く続けて来れた理由だと思っております。今はだまっけていてもお声が掛かるような演奏家はあまり所属しておりませんが、地道に研鑽を重ね、年に一度、二年に一度と、自身の活動の成果を発表される方々の手助けができれば、と思っております。

最後に、「これからの音楽界についての提案は何かありますか？」と課題を頂いたのですが、どうしたらいいのでしょうか？逆に皆様にご意見を伺いたいです。私から申し上げられるような明るい未来はないですね。ただし音楽ファンが減っている訳ではないと思っております。音楽の好きな人は増えていると。だって東京にオーケストラがいくつありますか。演奏会の数がどれだけありますか。優秀な演奏家もたくさんいます。学校での公演も盛んに行われています。音楽の無い生活も考えられません。どうすればよいのかはわかりませんが、きっと暗い未来では無いとは思っています。

(2015年11月25日 音楽プロデューサー協会例会にて)

記録 丸田 朗

映画評 ボーイソプラノ ただひとつの歌声

なんと合唱指揮者に！ ダスティン・ホフマンの新境地



合唱音楽振興会 事務局長／東京混声合唱団マネージャー 小林信一

古くは「レッド・バイオリン」最近「グレン・ゲールドをめぐる 32 章」でクラシック音楽をベースに神秘的な映像をとり続け高い評価を得てきたフランソワ・ジラル。劇場封切りが終わり間近の日曜に観てきました。

まず得難い魅力は公演ツアーを重ねる一流の変声期前の少年合唱団。アメリカンボーイズコールに家庭の複雑な少年が入団してやがて声変わりで団を去り新しい生活に進むという冒険とか、大作とかそういう世界とは無縁の地味な映画です。しかしながらこれは実に人生を、そして芸術の王道をしっかりとらえているのです。映画によって語られる「ことば」とでもいいでしょうかそれが実にうまい。ロケ地はアメリカのエリート大学イエール大学とか、重厚なホールが合唱団のツアーのシーンで映し出される。私ども 東京混声合唱団も 1987 年アメリカに演奏旅行をしてハーバードをはじめとする大学の教会のなかの聖堂での公演を体験したのでよくわかります。また旅行バスの窓から映るカテドラルの景色とかがよく雰囲気を出している。エピソードの会話で日本の「サントリーホールは良い響きのホールだ」などという会話が挿入されている。芸が細かい。ツアーで歌われる曲を練習している風景もありその曲がなんと小倉朗作曲「ほたるこい」をそのまま日本語で歌うシーンもあるのはおもしろい。この曲は私の好きな曲で先日日本演奏連盟主催の「創立 50 年合唱の夕べ」でも山田和樹さんに振ってもらった作品でした。彼もどうしてこの曲を振るのかかわからずにやってみたらおもしろく感じたようです。この曲は世界のスタンダードなんですね。あとなんとといってもキャストががいい。あのダスティン・ホフマンが演

技というより、一見なにもしないで人格や音楽性まで表していたのには驚きを感じました。軽くピアノを弾くシーンはラフマニノフです。これを見事にそれらしくやっていた。低音が美しい。(音は作られているように見受けた)このあたりの演技はなかなかできるものではありません。ヘンデルのハレルヤにオブリガードのようなものをつけて主役に歌わせるあたりはいかにもアメリカ的ですが。さてこの映画のテーマは「人生の旅立ち」でしょうか。青春は短いと言うことでしょうか。今風の風俗の中にしっかりと古典が息づいている。キャシー・ベイツが経営者で校長に扮し、デヴォラ・ウィンガーが故郷の主人公の才能を見抜く女先生役で出ていたのは、こんなところでお会いしましたねとの思いがしてなつかしかった。

なにか変わり映えばかり求めてくる日本の文化芸術風土にくらべ、今あることを当たり前のように続けているこうした変わらない伝統を持つアメリカに、いまでも実は大きく負けているのではないかと思い知らしめてくれました。芸術は儂いものでもあるのだということを感じさせる一級の作品です。

私事ですが、病を経験して 8 ヶ月の間、劇場で映画を見ること無しに過ごしました。閉所恐怖症の現象が起きるので車でトンネルに入るとか、とにかく暗闇は避けていたのですが、映画鑑賞復帰をクリアしてくれた作品はこの「ボーイソプラノ」(原題:「BOYCHOIR」)でした。音楽会をテーマにした映画もこれからは再び積極的に行こうと思っています。

BUSINESS
&
MONEY

教えたくないコスト削減の秘策

ロングランプランニング株式会社・代表取締役 **樽松大剛**

まだまだ景気の回復が実感できない中、税金や物価だけが上昇し、経営者の悩みは尽きないことと思います。コスト削減は、引き続き利益捻出のために有効な手段です。そこで、当社で行っているコスト削減策の一部を、通信費を中心にご紹介致します。一つでも参考になるものがあれば幸いです。

(1) 通話料が半額

テレホンカードで通話料が払えることは、聞いたことのある方も多いと思います。そのテレホンカードがこの数年値崩れし、金券ショップ等で半額で大量入手できます。結果、通話料を半額にすることが可能です。しかも事前にNTTにカードを送っておけば、月々通話料に充当してもらうこともでき、手続きも驚くほど簡単です。ひかり電話でももちろんOKです。弊社は年間 2.1 百万円の通信費を 1.1 百万円にすることが出来ました。

(2) イエデンワ (ウィルコム)

一言でいえば、固定電話の形状をした、携帯電話です。2年しぼりで電話本体は無料、毎月 980 円で 500 回かけ放題 (1回 10 分まで)。電話工事不要、配線不要、要るのはコンセントのみ。電話をかけることの多い社員の前に置き、かけるときにそれを使わせれば、翌月の電話代が驚くほど減ります。

(3) フリーダイヤル、会社を変える

フリーダイヤルの負担通話料は、未だ各社バラツキが大きい状況です。良番号を抱えるNTTは、固定から3分20円~80円、携帯から1分43円と、驚きの高さです。それがネオ・フリーコール (KDDI系) ならば、固定から3分7.5円、携帯から1分18円。そこで、まずNTTで良番号を取得し、すぐネオ・フリーコールに移管するのがベスト。良番号で安さを享受できます。

(4) 社員研修は定額で

社員を雇っても、中小企業では、大企業並みの研修を自社で行うことは到底できません。しかし最近、驚くほど良質の社員研修を、定額で提供する企業が出てきています。SMBCコンサルティング (入会金 54,000 円・月額 27,000 円) がお勧め。弊社は 30 人の社員が毎月 1 回受講。1 授業 21,600 円/人で年間 7.8 百万円かかっていた教育費が、0.4 百万円になりました。

今後も引き続き、少しづつでもご紹介できればと思っております。

(2015年6月23日例会にて 於：東京文化会館)

Classic Vicus 第 11 号 2016 年 1 月 音楽プロデューサー協会発行 編集/志村嘉一郎 デザイン・イラスト/梅津知美

音楽プロデューサー協会会員

在原 勝 (株)東京プロムジカ 代表取締役
石川高樹 (株)コンセールブルミエ 代表取締役
上野喜浩 すみだトリフォニーホール プロデューサー
内田一成 (株)フューチャーデザイン 代表取締役
梅津知美 (公財)多摩市文化振興財団 音楽プロデューサー
江藤昌子 こぶしくらぶ主宰 プロデューサー
小川光彦 アーツコム東京 (株) 代表取締役
兼岩好江 オフィス アルシュ 代表
樽松大剛 ロングランプランニング
(株)カンフェティ 代表取締役
黒川浩明 (有)大阪アーティスト協会 代表取締役
向後由美 ライター
小林信一 一般財団法人合唱音楽振興会 事務局長
東京混声合唱団 常務理事
斎藤 茂 OTTAVA(株) 取締役 ゼネラルマネージャー
佐々木仔利子 (特)日本室内楽アカデミー 理事長
志村嘉一郎 ジャーナリスト、元浜離宮朝日ホール支配人
白神克敏 (株)ヴォイスンク 代表取締役
高原加代子 (株)ミリオンコンサート協会
寺田有佑 (株)日本アーティスト 取締役会長
戸部山起子 (有)エクレジアアーツ 代表取締役
中根俊士 (株)東京アーティスト 代表取締役
中村由美子 リモージュコンサート (株) 代表取締役

萩生哲郎 ナクソス・ジャパン (株) デジタル事業部
橋本伸一郎 (株)いちべる 代表取締役
原 浩之 ハクジュホール((株)自寿生科学研究所) 支配人
平井 満 横浜楽友会/鶴沼室内楽愛好会 代表
広瀬光康 (有)新音楽家協会 代表取締役
(特)日本青少年音楽芸能協会 理事長
松崎三恵子 (株)シド音楽企画 代表取締役
松本京子 (有)おふいすべが 取締役
丸田 朗 (有)マルタミュージックサービス 代表取締役
村上雄一 (株)ユーラシック 代表取締役
村田 亨 (株)テレビマンユニオン
エグゼクティブプロデューサー
藪田益資 インターネット「クラシック・ニュース」プロデューサー
吉井寛行 公益社団法人オーケストラ連盟 専務理事

代表幹事 村上雄一
幹事 梅津知美 樽松大剛 中根俊士
丸田 朗 藪田益資

監査 平井 満
事務局長 石川高樹

Ongaku
Producer
Kyokai

2015年12月現在